

難攻不落への挑戦

日銀本店 旧一号館の解体と新館建築

陸軍の工兵隊を以てしても壊せない……。日本銀行本店の旧一号館は、そう言われるほどに堅牢な建物だった。新館の建設に伴い、その取り壊しは昭和四十四年に始まったが、予想を超える難工事となり、とりわけ地下階では船舶解体の特殊技術が用いられるなど、関係者の手を大いにわずらわせた。一連の大工事は昭和四十八年三月に終了した。その時、計画立案からはずで十数年の歳月が経過していた。

取材・文 河村清明



南側より見渡した日本銀行・本館の姿が左の写真である。「コ」の字に囲まれ低く見える部分が正面入口となる。昭和49年、重要文化財に指定されたこの本館は、東京駅と並び、辰野金吾の代表作の一つとされる。



日本銀行の本店と聞いて、その場所や姿の思い浮かぶ人は、当たり前だが少数だろう。

「日本橋本町」に所在しており、JR東京駅からも神田駅からも歩いてほど近く、日本橋の中央通りから目指すならば、三越・日本橋本店の裏手方向にあたる。

その建物は見る向きによって、実際のところ、表情をまったく変える。

南側に立てば、博物館が美術館にでも訪れたような気分になれる。

見えるのは本館の正面であり、「コ」の字に配された石造りの建物が、くぐり抜けてきた時代の長さや重みをすぐに伝えてくる。もし、そのそばを日銀と知らない人が通れば、まず間違いなく足を止め、建物の由来や所有者を確認するだろう。

反対へと回り、北側に立てば、打って変わってオフィスビルとしてそびえ立つ。最近では日本橋にも「COREDO日本橋」や「日本橋三井タワー」など、巨大なビルが増えたため、あまり目立たなくなってしまうが、それでも地上10階・地下五階のこのビルが完成した昭和四十八年の当時には、周囲に威圧感をもたらすほどの存在であり、やはり行く人の足を止めさせた噂が伝わっている。こちらが日本銀行の新館である。

さらに西側へまわると、新旧の対比は一気にきわだつ。材質も幅も高さも違う建築物が横に並んだ様は、あたかも年老いて背丈の縮んでしまった父親と、一方で人生の盛りに達した息子とが、何かの記念撮影に際して、隣り合わせて座ったような印象を伝える。一家の大黒柱として一時代を過ごした自負がそれぞれに漂い、また、互いの存在を間近に感じ取れる安心感が両者には行き来する。見方によってはアンバランス、別の見方をすれば不思議な調和に支えられたこの二つの建築物は、時代を隔てながらも、そう、たしかに「親子」にほかならない。

本館は明治二十九年二月に完成した。昭和四十九年には国の重要文化財に指定されている。

一方で新館は昭和四十八年に完

* (注)文中の敬称は省略しました。また、役職名などはすべて当時のものです。

正面入口から入ってすぐに位置する中庭。東大・藤森教授が「列柱をめぐる石畳」と書き表した場所である。かつてはここに馬車が到着し、お金や金塊を積み下ろした。馬の水飲み場（右）が今にそのなごりをとどめる。



右の3枚の写真は本館内、旧営業場を写したものだ。高い天井の下、かつてはここで本店業務が営まれていた。細部にわたる装飾は今も訪れる人の目を誘う。



成した。現在の日本銀行本店の業務は大部分がこちらの新館にて行われている。

「息子」の誕生には、実は大きな産みの苦しみを伴った。その大きさと長さを知るためには、やはりまず、父の歴史をこそさかのぼる必要がある。

日 本銀行が開業を迎えたのは明治十五年のことだった。

時代が変わり、政府や各地の国立銀行が紙幣の発行を始めていた。しかし明治十年、西南戦争が始まり、その戦費を賄うために大量の紙幣が発行され、結果としてインフレを招いた。

市中に出回る紙幣を回収し、以降の発券業務を一カ所に集約したい。そんな政府の意向により、明治十五年、日本銀行は設立されたのだ。

当初の仮店舗は永代橋のたもと（今の日本橋箱崎町）にあった。職

員数も五五人に過ぎなかった。その後、業務の拡大により職員が増え、迎えた明治二十九年、現在の場所へと移転したのである。

日本銀行本館の設計者は、名を辰野金吾という。中央停車場（現東京駅）や両国国技館なども手がけた当時の第一人者である。わが国近代建築の礎を築いた人物として広く知られている。

辰野の残した日銀本館とはいかなる建築物であるのか。その印象と特徴とを伝える美しい一文を見つけた。

もし、日銀を知りたく思うならば、冬の晴れた朝、列柱をめぐる石畳の上をゆくりと歩むのがよい。一人の人間と一つの時代が建築に込めた想いを了解することができる。美というものともちがう、技倆の巧拙を越えた何かが確かにある

記したのは東京大学教授の藤森照信、引用は『日本建築「明治大正昭和」第三巻』（三省堂刊）による。わが国の近代建築や都市計画史において、つとに名の知れた研究家である。

その藤森は日銀本店について、

次のように語る。

「この建物は複雑な様式を持っています。大きくはネオバロックと言っているのですが、ネオバロックであれば本来はもう少し細部が派手になる。その点からして非常に自制的なデザインといっているでしょう。そこには辰野さんの、時代への読みがあつたのだらうと推測しています」

その「時代への読み」とは何か。

「日本経済の発展段階を考えていたのでしょうね。つまり、まだ日本は近代化が始まったばかりであり、地味で質実にした方が合つとの考えがあつたのではないかと」

日銀本館を設計した頃、辰野は工科大学（現東京大学）の教授だった。その後、同大学を辞官し、設計事務所を設立、以降は作風を一変する。一般に「辰野式」と呼ばれる新様式を用いて、東京駅な

1854(嘉永7)年に生まれた辰野金吾は明治期を中心に活躍し、数多くの建築物を今に伝えるだけでなく、わが国建築界の礎を築くなど、その功績は広く知られている。1919(大正8)年、65歳で逝去した。左は日銀本館の立面図(新築時)。



完成直後の日銀本店のたたずまい。百余年の時を経て、現在、その外壁は重厚な色合いとなっているが、当時は街並みに白く映え、あたりでは相当に目立つ建物だった。辰野は、日銀の建物としては、この本店のほか、大阪支店旧館や旧小樽支店なども設計を手がけている。



本館工事中の様子。御影石による建造物は東京初であり、わざわざ関西から職人を呼び寄せ、石を刻ませた。辰野の注文は職人に厳しく、反発を覚えた職人が現場監督に食ってかかる場面もあったという。竣工式（左）は1896(明治29)年3月22日に行われた。

どを設計していったのである。

赤煉瓦を用い、派手で強い印象を残す東京駅と、質実剛健な印象を伝える日銀本館と。たとえばその両者に見られる差異が、藤森の指摘する「時代への読み」であつたわけだ。

日銀本館についてさらに付け加えておけば、他にも二つの「我が国初」との価値を持つ。一つは「日本人建築家による」初の国家的建築だった。それより以前、主要な建物は、政府から雇用を受けた外国人ばかりが担当していた。加えてもう一つ、「石造りによる」初の本格的建築でもあった。

「御影石の建物は東京では初めてでした。あの頃、周辺には伝統的な唐屋根の商家や土蔵が多く、そこに突然真っ白な建物が出現したわけですから、相当に目立ったと思いますね」

藤森はそう解説する。

竣工式は明治二十九年三月二十二日に行われた。以降、辰野家ではこの日が記念日となり、相撲好きの辰野は、裸身に赤毛布を巻き、相撲甚句をつなったり、土俵入りの真似事をしたりするのが常にな

つたという。

明

治という時代を伝える責重な建造物として、日銀本館は今にその姿を残すが、わが国の経済発展に伴い、一つの職場としてはやがて手狭な印象をぬぐいきれなくなった。

ゆえに、昭和に入ってから増築が続く、

・昭和七年 本館北側に一号館

・昭和十年 北東側に二号館

・昭和十三年 東側に三号館

の三つが相継いで完成した（本館にこの一―三号館を加えて、日銀では「旧館」と呼ぶ）。これらの設計は、辰野の高弟であり、日本建築士会・初代会長を務めた長野宇平治が担当した。実はそれまでも一度、増築の試みはあったが、関東大震災によって計画は頓挫せざるをえなかった。

ただ、そうした一連の拡張も、戦後の高度経済成長期においては、またもやまったくの手狭となった。もともとの敷地にかぎりがあり、さらには中央銀行としての業務が大きく幅を広げたからだった。

昭和三十年代のなかばを迎え、

ついには新館建築の計画が持ち上がった。道を隔てた旧館の北側に、日銀の北分館や手形交換所があり、その一角を用地に当てようと目論まれたのだ。

だが、この案には難点があつた。新館と旧館をどう繋^つげるか。そこにつまみ解決案が見つからなかった。

「地下道を作る。さらには空中の廊下で繋ぐ。そんな案が出ましたが、それではせっかく新館ができて業務効率が高まらないと、話がまとまらなかったんです」

語るのは、管理部・特別建築課長を務めた新藤稔である。当時を知る、今となつては数少ない一人であり、その言葉は貴重だ。

最終的には、間に位置する道路を北へと移設し、旧館に新館を隣接させることになった。これが最も効率的だと判断からだった。もちろん、こうした案の実現には、

周辺住民の協力が不可欠だった。道路の移設も無事終わり、昭和四十一年十月より、新館の建築工事がスタートした。

実はある決定が、その計画の過程にて下されていた。もともと新

館は旧館の北側、詳しく言えば一号館と二号館に隣接して建つ予定だったが、加えて一号館を解体し、新館をより拡張しようと決まったのである。

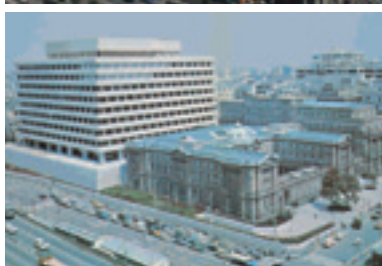
旧館と新館をいかに調和させるか。そしていかに機能的に連動させるか。設計に際して、それが関係者を最も悩ませた課題であつた。

一号館を残したままでは、たとえ新館が誕生しても、有効面積や使い勝手などの面から見て充分とは言えない。また新旧の有機結合からしても、合格点を付けることはできなかった。そうした一連の検証を経て、最終的には一号館の解体が決まった。一部とは言え、長年慣れ親しんだ旧館の解体に、断腸の思いを抱く行員は少なかった。

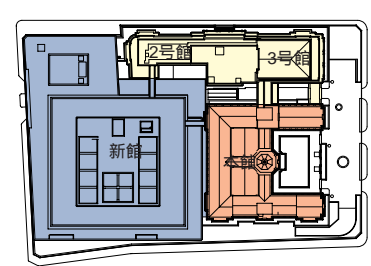
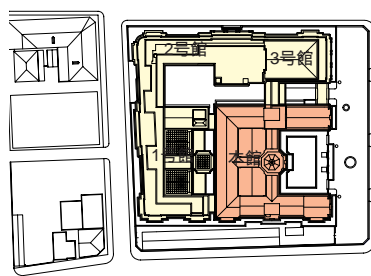
第一期工事となった新館建築については、中央銀行として、どんな災害にも耐えられる堅牢性が何より求められた。結果、関東大震災の一・五倍もの地震に耐えられるよう設計され、たとえば震が間ビルと比べた際に、高さ一四七メートル 五九メートル、総延べ面積一五・二万平方メートル 九万



新館の建設にはきわめて特殊な工程が用いられた。まず、旧館の北側に新館の北半分を造り(写真上)、その後、旧1号館を解体し、その跡地にさらに新館の南半分を造り、最終的にその両者をつなぎあわせた。昭和48年3月に完成した姿が、写真下となる。



日銀本店の平面図。新館増築着工前(昭和41年当時)のもの(上)と、新館増築完成時(昭和48年当時)のもの(下)。



難工事の連続となった旧1号館解体の様子。石造りの壁が倒され、更地に戻された下には、最大の難所と呼ばれた金庫室の存在があった。その撤去には、船舶解体の技法を用いるしかなかった。



平方メートルと、建物が低くて小さいにもかかわらず、総重量はなんと三倍以上も重く完成した。つまり、使用した鉄骨の総量が非常に多かったのである。この数字が新館の堅牢性を何より証明している。

そしてその後、一号館の解体が遂に始まった。当初より「世紀の難工事になる」との指摘はあったが、いざ始めてみると、実際の困難は関係者の想像を大きく超えていた。

日本陸軍の工兵隊でも壊せない。

一号館の頑丈さは、完成当時、そのように言われるほどだった。まさに難攻不落の要塞に近かったのである。

地上階はまだよかった。床や梁を落とし、残った壁は倒してしまえばすむ。その作業は

ふだん町で見かける解体工事とさほどの差異はない。しかし地下階については簡単ではなかった。床も壁も、非常に厚いコンクリートでできており、解体がうまくいかどうかは、ダイナマイトを使っただけでは試してみるまでわからなかった。最終的に、この一号館解体に使用された火薬は、合計で八トンにものぼった。

さらに、地下にあつた金庫室が最大の難所となった。周囲には、厚い鉄板を何枚も重ねた装甲板・スチールライニングが張りめぐらされており、このスチールライニングや金庫の扉に対しては、船舶解体の技法を用いるしかなかった。きわめて狭い場所での、苦しい切断作業が続いた。地道な継続だった。

ようやく迎えた昭和四十八年三月、新館と接続する部分の旧館の改造も終わり、一連の工事は無事に完了した。

新藤が言う。

「日銀の建築物で言えば、実は初めて、建築会社五社によるジョイントベンチャーがこの時の仕事を請け負ったんです。五社のうち、

どの企業の技術を使うかなど、難しい交渉が続きました。そうした積み重ねが、新館完成の背後にはありました」

あらためての安堵を浮かべて、新藤が微笑んだ。

そのジョイントベンチャーの担当者によれば、旧館の現場では一〇万人が、新館では八〇万人の作業員が働き、さらに材料製造など間接的に携わった者を含めれば、関係者の総数は二〇〇万人にものぼったという。計画からはおよそ一五年が、着手からは七年が経ち、こうして現在の日本銀行本店は世に登場したのである。

落成したばかりの新館は、そばに建つ旧館に支えられる形でその一歩を踏み出した。工事に携わった二〇〇万人と日銀の行員はもちろん、新たな「親子」の姿を最も喜んだのは、もしかすると辰野金吾と長野宇平治、空の上から優しい視線を送る二人の旧館設計者だったかもしれない。



一連の難工事に携わった新藤稔氏。管理部特別建設課の課長だった。「世間の様々なことについて一番勉強になった時期かもしれない」と当時を振り返る。